

先月の21日(金)大町北小学校の一年生から三年生までは遠足でした。一年生になったばかりのうちの子どもは北小学校から木崎湖キャンプ場への遠足。今頃お弁当食べて帰りの準備でもしているのかなと奥様と話をしていたら先生から電話が!。そうですこの日に平郵便局に強盗が...(-_-;)。強盗さんへこんな田舎で犯行しなてください(^_^;)。

発行元: 大町デリバリーサービス松尾新聞店

発行枚数: 2600部

発行日: 不定期 宅配されています信濃毎日新聞・朝日新聞・毎日新聞・産経新聞といっしょにお届けしております。ご意見ご感想お待ちしております!

大町巡拝の旅 『仁科三十三番札所めぐり』

第6回目となりました『仁科三十三番札所めぐり』、今回は八番札所の了瑞庵と三十二番札所の仏崎観音寺の紹介になります。

<八番札所 了瑞庵 りょうずいあん>
『これや世の たからの池か ちまち田に わくる庵の のきの下水』



了瑞庵は高根町(当時は高根新田村)の北西寄りにある小堂である。このあたりは扇状地の末端で、ステージ状の台地となっており、ところから、猿楽の舞台跡などという連想がうまれたのであろう。また詠歌にあるように、すぐ前方にかつては湧き水があつて池になっていた様子もうかがえる。

了瑞庵は昔から、大町組の大庄屋を長く勤めた栗林家の祀るところであるが、いつ頃開創されたかは不明である。高根村は南方の古宮周辺がはじまりで、すでに平安時代頃には住む人があつたらしいことは、出土品などからも知られる。その後次第に開発が北方に延び、江戸時代初期の寛永年間には、すでに定納高三十石あまりの「高根新田」が成立していた。大町村から高分かれして独立村高根新田村となったのは慶安四年(1651)で、承応三年(1654)に検地が行われた。

このあたりの土地は栗林家の所有地であり、新田開発に同家が力を入れたことであり、高根新田村の安全と発展を祈願する意味をこめて、この了瑞庵を開いたのではあるまいか。

了瑞庵の本尊は像高28センチメートルの銅造聖観音座像で、たいへん念入りな見事な作である。未開蓮華や光背台座を失っているのが惜しい。

<三十二番札所 仏崎観音寺(窟 いわや)>
『身を捨て 入らずば知らじ 仏崎 法の窟(いわや)の 深き心は』

大町市常盤泉・仏崎にある仏崎観音寺は「窟(いわや)」とも呼ぶ。犀川切り開き、この辺り一帯を肥沃の地とした「泉小太郎伝説」では、この寺の裏手の山の中腹にある洞穴に、小太郎と母・犀竜が隠れていたとされる。厄除け観音として知られ、昔は近郷近在のほか遠くからの参拝者が訪れた。毎年春に寺近くで「奉納草競馬」が開かれていたが、道路新設に伴い、別の場所に移り、観光草競馬として続いている。



左側画像は蓮華大橋に設置された龍と小太郎像

いつもどこかで <ウグイスとスズメ>

トル、ピチピチピチピチ、チチチチチー。 斎藤隆介さんの童話で知ったヒバリの鳴き声は、天高く上昇して、ホバリング（空中停止）しながら縄張り宣言するまでの変化を見事に描写しているではないか。 ヒバリやウグイスの声に、春を感じる人は少ない。 山口仲美さんの名著「ちんちん千鳥のなく声は」（講談社学術文庫）によると、ウグイスの鳴き声は平安時代には「ウークヒ」「ウークヒス」と聞かれたり、「ヒトクヒトク（人来人来）」と書かれたりしていた。鎌倉・室町時代に、ウグイスを飼ってよい声で鳴くよう訓練が始まると、「ツークヒホシ」（月日星）と鳴かせるのが流行った。江戸時代、若いウグイスのさえずりを「ホホウホホウ」とほめ言葉に聞いた。ウグイスの声が「ホウホケキョウ」に定着したのも江戸からで、ホケキョウは「法華経」の意味にかけられたとか。鳥の鳴き声を、聞いたままに書き表すのは難しい。同僚がガチョウの声を「キャラッ」と書いていた。さて、次の鳴き声が分かりますか。 チーラム チョチ チョン チー ツイーン チョチ チーラム チョン チョチ 川村多実二さんが「鳥の歌の科学」（中央公論新社）で紹介したスズメの声だ。おや、うちの庭にもスズメが来た。 チイチョッ ジュッチョン。 新聞記者・清水 弟（山形県・鶴岡支局）

今年はおかしい。4月というのに真冬の寒さがぶり返し月山の雪が白さを増した。それでも、田畑の上からヒバリのさえずりが聞こえて来る。 ピーチ・ピーチ、リートル・リ

木崎湖キャンプ場の怪人？

先月の5月3・4日と木崎湖キャンプ場で「ジェysonさんが彫る！」というイベントがあり観てきました。インターネット動画サイトで現在 爆発的な人気をほこるジェysonさんが来て木崎湖で有名なアニメキャラクターをチェーンソーだけで彫り上げていくというイベントでした。



若い世代やアニメオタク・ネットオタクな方たち？には有名かもしれませんが、年配の方々は知らないのでは...？。

映画の「13日の金曜日」に出てくるジェysonのようにホッケーマスクを付けたこの方、実は安曇野市在住の彫刻家で、日展などにも出展されていて数々の賞をとっているという有名な方なのです。息子さんにせがまれて冗談で始めたこのアニメキャラクターの制作、

今では動画サイトでものすごい人気に！。なぜマスクつけるのと聞いてみると、「いい年した おじさんが素顔でアニメキャラは彫れないよ」とのことでした。制作しているのはアニメキャラクターだけでなく、右側の画像のような「阿修羅像」や「鳳凰」のようなガチンコな作品もあります、ただ全体的にはアニメキャラクターが多いのは 息子さんの許可が出ないためとか...(^_^)。なにせ動画を編集するのが息子さんなもので...。個人的にももっとガチンコな作品が好きなので是非とも次回作はアニメでない物を見たいものです...。



新聞に載らない内緒話！

行きつけの飲み屋のテレビは年代物である。でっかいブラウン管を抱え、プラスチックのそれは、タバコの煙に燻され、茶色に変色し、リモコンはひび割れている。だからBS放送など受信できない。アナログ専門である。それでも映るから客には重宝している。4月。野球シーズンが始まると、かつてこのテレビはプロ野球中継一辺倒だった。一日の仕事を終えた労働者たちがかたずをのんで画面を見守った。巨人ファンばかりだった。ところが最近では野球中継がない。「ラジオの中継を流してよ」と客はしびれを切らすが、店の主人は「じゃあ、ラジオ買っておいで」と取り合わない。

中継が無いから、話題といえば女と博打だけで、店は殺伐としてきた。視聴率が取れないから野球中継などない。ファンの気持ちなど、テレビ局は斟酌してくれない。ファンと選手のための野球は今、いかにも心もとない。例えば2004年にプロ野球初のストライキが起きた。ある作家がこんな文章を残している。この騒動を通じて、野球界の体質が分かった、と書いている。抜粋する。

「オーナーたちは自分を殿様のようなものと自惚れており、選手を家来か又家来（またげらい）くらいにしか考えていない 新しく球団を持ちたいという者があれば、その者から何十億という加盟料（しょばだい）を取る その加盟料は既存球団が山分けする しかも加盟を希望するのは「しかるべき企業」でなければならない さらに「しかるべき企業」かそうでない企業かについて判断する基準が無く、オーナー会議が多数決で決める 球団社長も球団代表もじつはオーナーの使い走りにすぎなかった コミッショナーが独活（うど）の大木よりも役に立たない存在だった」。なんとも手厳しい指摘である。まあ、現実には楽天が参入し、札幌、仙台にと地元根付こうとする球団も現れた。少しは進歩したのだろう。もっともオーナー達や、野球機構関係者が本当に心を入れ替えたのかどうかは怪しいものである。視聴率が取れないのはなぜなのか、どうしたら球界は生き返るのか、現実を直視した改革が見えないのである。

さて、前述の「作家」とは誰だろう。4月9日に亡くなった、井上ひさしさんである。国鉄スワローズ（現東京ヤクルトスワローズ）のファンで、野球にまつわるエッセーも多い。小説家、劇作家、放送作家としての顔ばかりが有名だったが、どっこいファン、選手の立場から野球をひたすら愛した、その人だった。冥福を祈りたい。

(有) 大町デリバリーサービス松尾新聞店

大町市大町2675-7 (ハローワーク大町すぐ近く！)

電話：フリーダイヤル 0120-030553

FAX 0261-22-8402

HPアドレス : <http://shimbun.web.fc2.com/>

